

平成30年度佐世保市「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」報告書

門田 理世（西南学院大学） 渡邊 由恵（九州産業大学）

沖本 悠生（九州産業大学） 角田 一枝（東九州短期大学）

佐世保市幼児教育センター

I. はじめに

「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」は、平成27年度より、佐世保市幼児教育センターを中心に、少子化対応推進事業の一環として実施されている。本事業は、参加する保護者が、①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生とかかわることで、地域の一人としての存在を意識することを目的としている。また、佐世保市教育委員会は、毎年6月を「いのちを見つめる強化月間」、6月1日を「いのちを見つめる日」と設定し、学校・地域・家庭が連携し、いのちの大切さについて考える様々な取り組みを行っている。本事業もその取り組みにも寄与するものとして、児童にとって、①いのちの大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族（親）との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育ての予備的体験をする機会を提供し続けている。

上記、本事業のねらいがいかにより達成されているのかの成果や今後の課題を見出すため、保護者、児童それぞれの立場から事業の意義を検証した。平成30年度の検証結果を以下に報告する。

II. 調査の概要

【本事業の概要】 赤ちゃんのお世話の仕方や赤ちゃんの発達など事前学習を受けた児童4～6名と親子2～3組が1つのグループとなって赤ちゃんと一緒に遊ぶ中で、児童が赤ちゃんの母親から子育てや赤ちゃんの話を聞く体験をする。幼児教育センターがコーディネーターとして事業運営を行っており、ふれあい体験の際は、センター職員やボランティアスタッフがファシリテーターとなり、児童と母親をつなぐ役割を担っている。

【調査対象】 幼児教育センターを利用し本事業に参加を希望した保護者とその赤ちゃん（おおむね3か月～12か月）延べ85組、市内の公立小学校に通う児童4・5・6年生221名

【調査内容】 事業参加に応募した保護者、児童双方に、事業実施月（4校6月、2校11月実施）の事前・事後でアンケート調査を実施。自由記述の分析は、保護者・児童の回答に意味するコードを付し、そのコードをカテゴリに整理分類する質的分析を行った。以下コードを〈〉、カテゴリを『』で表す。

表1 本事業の実施状況

日時	開催場所	参加者数	
		親子数	児童数
6/15(金) 10:30～11:15	木風小体育館	36名(18組)	木風小学校6年1組、2組(46名)
9/19(火) 10:30～11:15	金比良小イングリッシュルーム	18名(9組)	金比良小学校5年1組(16名)
6/22(金) 10:40～11:25	幼児教育センター全研修室	32名(16組)	白南風小学校5年1組、2組(44名)
6/28(木) 10:30～11:15	大久保小体育館	34名(17組)	大久保小学校5年1組(22名)、6年1組(25名)
11/16(金) 10:30～11:15	幼児教育センター全研修室	24名(12組)	潮見小学校6年1組(24名)
11/28(水) 10:30～11:15	三川内小わくわくルーム	26名(13組)	三川内小学校4年1組(33名)
「大きくなったね」 12/14(金) 10:30～11:15	幼児教育センター全研修室	26名(13組)	白南風小学校5年1組、2組(44名)

表2 アンケート項目

小学生事前アンケート		保護者事前アンケート	
問1	年齢・性別・兄弟の数・自分が兄弟の何番目か	問1	年齢・性別・お子さんの月齢・第何子目か
問2	これまでの赤ちゃんとの触れ合い経験の有無、回数、触れ合った対象	問2	事業に参加しようと思った動機
問3	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること（自由記述回答）	問3	事業に参加した回数
問4	赤ちゃんに触れ合う中でしたいこと（自由記述回答）	問4	平素、小学生と触れ合う機会の有無、触れ合う場面
問5	赤ちゃんの保護者についてみたいこと（自由記述回答）	問5	小学生に対するイメージ（自由記述回答）
		問6	子育てに対する不安や気になることの有無、その内容 相談する相手の有無、相談する相手
小学生事後アンケート		保護者事後アンケート	
問1	事業に参加して感じたこと	問1	事業に参加した回数
問2	赤ちゃんに触れ合った内容（自由記述回答）	問2	事業に参加して感じたこと
問3	そのときの気持ち（自由記述回答）	問3	保護者が事業に参加したよかったか、その理由
問4	赤ちゃんに触れ合ってよかったか、その理由	問4	赤ちゃんが事業に参加してよかったか、その理由
問5	赤ちゃんの保護者と話したか、その内容	問5	小学生のイメージの変化の有無、その理由
問6	赤ちゃんの保護者と話してよかったか、その理由	問6	小学生が赤ちゃんに触れ合うことがよかったか、その理由
問7	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること（自由記述回答）	問7	今後この事業に参加したいか、その理由
		問8	事業に対する感想や意見（自由記述回答）

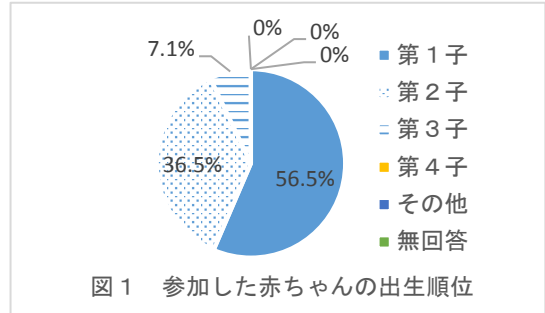
Ⅲ. 調査結果および考察

1. アンケート回答者の属性

【保護者】事業に参加した保護者は延べ85名で、年齢構成(表3)は主に20、30代の母親である。参加した赤ちゃんは、第1子が約6割で(図1)で、1人っ子が約5割である。また事業に初めて参加する保護者が約7割で、「平素、小学生と触れ合うことがあるか」という問いに対し、あると回答した保護者は約42%、ないが約58%であった。

表3 保護者の年齢

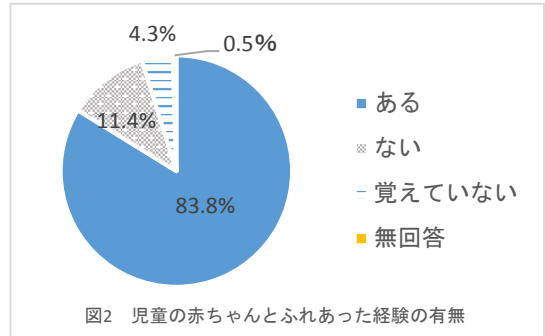
保護者の年齢	単位：人数
20歳代	26
30歳代	57
40歳代	1
50歳代	1
無回答	0
合計	85



【児童】今年度は、昨年度より2校実施校が増え6校での開催となった。事業の意義や成果が少しずつ見えるようになってきたことや幼児教育センターと小学校との関係性で周知されていることが考えられる。事業に参加した児童は211名であるが、1名は属性不明の為、事前210名、事後は欠席者を除く206名を分析対象としている。学年の内訳は、4年生33名、5年生82名、6年生95名である。きょうだい構成(表4)は、自分の下に弟・妹がいる児童が116名、末子・一人っ子が94名と、若干ではあるが、弟や妹がいる児童が多い。また、「これまで赤ちゃんに触れ合ったことがあるか」という問いに対し、明確にあると答えた児童176名(約83%)に対し、ない・覚えていない・無回答は34名で全体の約16%であった。弟妹のいない児童でも赤ちゃんに触れ合ったことがある層が多い集団の特性が見られた。

表4 児童のきょうだい構成

生まれ順	人数	弟・妹の有無	人数
長子	76	有	116
2~5子	40		
末子	74	無	91
一人っ子	20		



2. 保護者の事業参加への意識

(1) 保護者が持つ児童に対するイメージの変容

参加保護者に事業の事後に「この事業に参加して小学生のイメージが変わりましたか?」という質問を行ったところ、イメージが変わったと回答した保護者は35名(約4割)であった。小学生のイメージが変容したと回答した保護者は、事前に「元気」「素直」「可愛い」「しっかりとしている」「恥ずかしさがある」「関わりの難しさがある」「地域とのかかわりが少ない」などのイメージを児童に抱いていたが、事後では、児童が自身の赤ちゃんに触れ合う姿を通して、しっかりとした姿が見えた『児童の振る舞いや考えの早熟さ』、児童らしい純粋な姿が見えた『児童の振る舞いや考えのあどけなさ』、赤ちゃんへの接し方から一人ひとりの個性の違いを感じた『児童の個人差』、そして、前回関わった学年との違いを感じた『児童の年齢差』など、児童の精神的発達や態度を認知する結果が得られた。また、我が子に優しく接する『児童の赤ちゃんに対する優しさ』、笑顔で関わる『児童の笑顔で赤ちゃんに接する姿』、おもちゃで赤ちゃんをあやす『児童の赤ちゃんに関する知識やお世話のスキル』など、児童の赤ちゃんに対する心情や態度を意識する結果が得られた。

事業の事前では保護者の児童に対するイメージは「元気」「優しい」などの単語での抽象的な回答が多かったが、事後では『児童の振る舞いや考えの早熟さ』について「あいさつがとても良くて、自己紹介を進んでしてびっくりしました。」「『児童の赤ちゃんに対する優しさ』を「どの子もとっても優しく穏やかな表情を見せてくれて嬉しいです」と回答するなど、保護者自身の言葉で具体的に児童の姿を語るようになっていた。この変容は、事業の中で保護者と児童が実際に触れ合うことで、保護者の児童に対する理解が深まったからであり、このふれあいが、保護者の児童観を深め、児童理解をより促す機会になったと言える。

事業の事前では保護者の児童に対するイメージは「元気」「優しい」などの単語での抽象的な回答が多かったが、事後では『児童の振る舞いや考えの早熟さ』について「あいさつがとても良くて、自己紹介を進んでしてびっくりしました。」「『児童の赤ちゃんに対する優しさ』を「どの子もとっても優しく穏やかな表情を見せてくれて嬉しいです」と回答するなど、保護者自身の言葉で具体的に児童の姿を語るようになっていた。この変容は、事業の中で保護者と児童が実際に触れ合うことで、保護者の児童に対する理解が深まったからであり、このふれあいが、保護者の児童観を深め、児童理解をより促す機会になったと言える。

表5 事業を通して得られた参加保護者の児童観

カテゴリー	コード
児童の精神的発達や存在	児童の振る舞いや考えの早熟さ(10)
	児童の振る舞いや考えのあどけなさ(8)
	児童の存在そのものの可愛さ(3)
	児童のポジティブな態度(2)
	児童の個人差(1)
	児童の年齢差(1)
児童の赤ちゃんに対する心情や態度	児童の赤ちゃんに対する優しさ(12)
	児童の笑顔で赤ちゃんに接する姿(2)
	児童の赤ちゃんへの興味を持った態度(1)
	児童の赤ちゃんに関する知識やお世話のスキル(1)

(2)子育て支援としての「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」

事後で保護者にこの事業に参加して良かったか尋ねたところ、9割の保護者が参加して良かったと感じていた。その理由として、『保護者自身が小学生と触れ合う良さの実感』『我が子が保護者以外の人と触れ合う良さの実感』『小学生の役に立てた実感』『自身の子育ての振り返りと見通し』などが挙げられた（表6参照）。

事前に保護者に子育てに対する不安や気になることを尋ねたところ、約5割の保護者が「悩みがある」と回答しており、最も多かった悩みは『母親自身の子育て力に関すること』であった。自身の子育てについて「自分の子育てが正しいかどうか、正解はないけれど、これでよいか、将来の見通しが立たない。」や「自分の子育てが大丈夫なのか。」と不安に思う保護者が「小学生が純粋に子供と触れ合う姿を見て、自分の育児についても初心にかえることができた」、「我が子の10年後が楽しみになった」と回答し、事業を通して『自身の子育ての振り返りと見通し』が持てたことで、事業後に子育てに対する前向きな気持ちが表出していた。

表6 保護者が事業に参加して良かった理由

カテゴリー	コード
保護者自身が小学生と触れ合う良さの実感	保護者が普段触れ合う機会の少ない小学生と触れ合えたこと(15)
	我が子への小学生の接し方から嬉しさを感じたこと(10)
	小学生と楽しく触れ合えたこと(5)
	小学生の良い面が見られたこと(4)
	小学生の話が聞けたこと(3)
	保護者自身が触れ合いを通して元気になったこと(2)
我が子が保護者以外の人と触れ合う良さの実感	我が子が楽しんだり、喜んだりしていたこと(6)
	我が子が小学生と触れ合えたこと(4)
	我が子が様々な人と関れたこと(4)
小学生の役に立てた実感	小学生に赤ちゃんに触れ合う機会を提供できたこと(6)
	小学生に赤ちゃんとの触れ合い方を伝える機会となったこと(3)
	小学生の学習の役に立てたこと(3)
自身の子育ての振り返りと見通し	我が子の将来を見通せたこと(8)
	自分の子育てを振り返る機会となったこと(3)
小学生の様子（実態）の把握	小学生の発達を知れたこと(2)
	小学生の我が子に対するお世話のスキルが見られたこと(2)
	赤ちゃんとの触れ合いを通じた小学生の様子を知れたこと(2)
	小学生の可愛さを感じたこと(1)
命の大切さの認識	保護者自身が命の大切さを感じたこと(1)

このふれあいが保護者の子育てに対する不安を解消する一助になっていることが示唆された結果であり、この事業は子育て支援の目的に対して一定の意義があったと言える。

また、保護者自身児童と触れ合うことができたと実感している中で、「小学校時代に赤ちゃんとのふれ合う機会がある方が大人になって子育てのたのしさもわかる気がする」と、児童がこの事業を通して赤ちゃんとの触れ合うことの意義に言及する回答も得られた。保護者が児童の質問に答えたり、赤ちゃんとの関わり方を伝えたりしたことで、地域の児童の学習の役に立てたことを自覚し、事業の目的である『保護者自身が地域の一員であることを意識する機会』となったことが伺える。

3. 児童の事業(授業)参加後の意識

(1)赤ちゃんとのふれあいがもたらした児童の意識

事後アンケート問4「赤ちゃんとのふれあってよかったか」という問いに対し、「よかった」「まあまあよかった」と答えた児童は全体の99%に上る。その理由(表7)として、最も多かった回答が<日頃できない体験をしたこと>であった。自分の下にきょうだいのいない末子・一人っ子だけではなく、長子・2~4子も日頃できない体験として本事業を捉えている。次いで<命の大切さに気付いたこと>の回答数が多くあげられた。児童の多くが、本事業において、赤ちゃんを抱っこしたり、頬を触ったりしており、直接触れたことで

表7 赤ちゃんとのふれあいがもたらした児童の意識 ※一部を抜粋して掲載

カテゴリー	コード
赤ちゃんについて	赤ちゃんがかわいかったこと(24)赤ちゃんとのふれあえたこと(10)赤ちゃんが笑ってくれたこと(12)赤ちゃんについて知れたこと(11)赤ちゃんのお世話の仕方を知れたこと(6)赤ちゃんが反応してくれてうれしかったこと(6)赤ちゃんと仲良くなったこと(2) 他
ふれあい事業について	日頃できない体験をしたこと(41)お母さんと赤ちゃんが来てくれたこと(1)ふれあいの時間を大切に過ごせたこと(1) 他
命について	命の大切さに気付いたこと(28)自分と人の命を大切にしようと思ったこと(1) 他
赤ちゃんの親について	子育ての大変さを知ったこと(12)親の大変さを知れたこと(9)親の想いを知れたこと(3)親の大切さを知れたこと(2)母親の大変さを知れたこと(5)母親の気持ちを知れたこと(2)父親の大変さを知ったこと(1)
自分と自分の親について	自分の赤ちゃん時代を思い起こすことができたこと(5)自分が親にしてもらったことを知れたこと(1)自分に対する保護者の思いに気付けたこと(1)自分が大切育てられたことに気付けたこと(1)今までの生活を反省できたこと(1)

赤ちゃんの繊細さや温かさ、柔らかさを実感したことが伺える。また、<赤ちゃんが笑ってくれたこと>、<赤ちゃんが反応してくれてうれしかったこと>など、自分の関わりに対して赤ちゃんが応えてくれたことも、目の前にいる赤ちゃんが生きていることを実感することにつながっていることが推察される。

(2)保護者とのふれあいがもたらした児童の意識

児童は、「赤ちゃんの母親とどのような話をしたか」という問いに対して、赤ちゃんの母親と、<赤ちゃんの名前の由来><赤ちゃんの日常生活>などの『赤ちゃん中心の話題』や、<子育ての大変さ><子育ての喜

表8 赤ちゃんの母親とのふれあいがもたらした児童の意識

カテゴリー	コード
赤ちゃんに関する知識の取得	赤ちゃんについて知れたこと(48)
	赤ちゃんの日常を知れたこと(6)
	赤ちゃんの個性を知れたこと(5)
	赤ちゃんのお世話について知れたこと(1)
	赤ちゃんの成長に気付けたこと(1)
	赤ちゃんの存在の意義について気付けたこと(1)
保護者の立場の理解	子育ての大変さを知れたこと(28)
	子育ての大変さと喜びを知れたこと(5)
	母親の赤ちゃんに対する思いを知れたこと(10)
	子育ての方法や工夫を知れたこと(3)
	子育ての多面性を知れたこと(1)
自分の親に対する理解と気づき	自分に対する保護者の思いに気付けたこと(5)
	自分の赤ちゃん時代を思い起こすことができたこと(5)
	保護者に感謝・尊敬の思いを持てたこと(3)
	自分が大切に育てられたことに気付けたこと(3)
自分自身に役立つ知識の取得	自分の将来に役立つ知識を得たこと(34)
ふれあった母親へのポジティブな感情	アドバイスをもらい実践できたこと(2)
	母親の対応の優しさ・親切さを感じたこと(21)
	母親とコミュニケーションを取れたこと(12)
	日頃できない体験ができたこと(3)
ふれあい体験のネガティブな感情	母親のすごさを知れたこと(2)
	話の内容がおもしろかった(1)
	母親とコミュニケーションを取れなかったこと(4)
	会話の内容への不満があった(1)
	話の内容がおもしろくなかった(1)

び・楽しさ><赤ちゃんのお世話の方法と工夫><母親の赤ちゃんに対する想い>などの『赤ちゃんのお母さん中心の話題』、また<児童のきょうだいの話><児童に対する児童の保護者の思い>などの『児童中心の話題』について話をしている。母親との話を振り返り、「赤ちゃんのお母さんと話してよかったか」という問に対し、約9割の児童が「よかった」「まあまあよかった」と答えている。母親との会話を通して、児童は『赤ちゃんに関する知識の取得』『保護者の立場の理解』『自分の親に対する理解と気づき』『自分自身に役立つ知識の取得』などができたことを自分にとって良かったこととして認識していた(表8)。<赤ちゃんについて知れた>という漠然とした回答が最も多かったが、赤ちゃんの日常や個性等具体的な事例を挙げる児童もいた。興味深いことに、<子育ての大変さを知れたこと>をよかったと答えている児童もおり、子育てをする保護者の立場から子育てを俯瞰する側面が表出した。また、「私も赤ちゃんのころはお母さんなどに育ててもらったから、話を聞いてこんなにも苦労しているんだなと思いました」という回答もみられ、赤ちゃんの母親の赤ちゃんに対するかわりを見たこと、思いを聞いたことが、『自分の親に対する理解と気づき』を促したことも推察される。本事業で初めて出会った赤ちゃんと保護者とのふれあいが、児童自身に自らがいかに育てられたかへの意識を喚起し、振り返るきっかけとなっていることが明らかとなった。さらに、赤ちゃんの母親から子育ての話聞き、「ぼくがお父さんになった時にその話しを思い出して子育てに役立つと思ったから」など、<自分の将来に役立つ知識を得たこと>をよかったこととして捉えている児童もおり、自分が将来親になる存在であることを認識し、児童なりの当事者意識を持って母親の話聞いていることが伺い知れた。

児童の意識が概ねポジティブに成長した一方で、『ふれあい体験のネガティブな感情』を感じている児童も数名おり、赤ちゃんとのふれあいは楽しかったが、<母親とコミュニケーションを取れなかったこと>が児童にとって残念なこととして印象に残ったことが伺える。同じ学年でも発達個人差があること、グループ内での雰囲気等が理由として推察されるが、その詳細については不明であり、今後の検討課題として挙げられた。

IV. まとめと今後の課題

本事業に参加した保護者は、児童と直接的なふれあいを通して、それまで漠然としていた児童のイメージが具体的なものに変容していることが明らかとなり、赤ちゃんと児童のふれあいから、保護者がわが子の育ちの先にある児童の存在について改めて理解を深める機会になっていることが示唆された。また、児童にとっては、ふれあい体験が本事業の目的である「いのち」について考える重要な機会となっていること、赤ちゃんのことを理解するだけでなく、自分自身を振り返り、自身と親との関係を考える機会となっていることも明らかとなった。本調査の結果は、本事業がその目的(I. はじめに参照)を果たしていることを示唆するものである。

加えて、事業4年目となる今年度は1校を対象に、6月実施の本事業に参加した児童と、赤ちゃんとその母親が12月に再会する「おおきくなったね」が実施され、再会した赤ちゃんに、児童が自ら積極的に関わろうとする姿も見られた。今後は、児童にとって継続して複数回赤ちゃんやその保護者とのふれあいを体験することの意義を検証すること、また、本事業の体験が、児童が思春期を迎えた時に何らかの影響をもたらすのか、検証することが必要である。加えて、保護者においては、複数回参加している保護者の意識に着目し、子育て支援としての本事業の意義を継続して検証していくことが、子育て不安解消の手立てを構築していく上で必要である。

本事業をコーディネートしている幼児教育センターは、乳幼児の育ちや子育てに関する専門家が常駐している地域に開かれた施設であり、市民、行政、保育施設、学校等、多種多様な機関や人々とのかわりを持っていく。保護者の子育て支援と、子どもの育ちを支える地域の拠点としての幼児教育センターの役割を検証するためにも、本事業の継続的な追跡調査が重要である。